

国

語

(
解答
番号

1

～

43

)

I 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答番号は、

1

ゝ

25

。

人間の知覚経験は中立ではない。すべての経験は主観的であり、客観的経験などありえない。よって、究極的に経験にもとづかねばならない科学データ収集の行為は客観的ではなく、データそのものも客観的でも中立でもない。

A この主張は正しいだろうか。そして、もしこの主張が正しいければ、科学の客観性が A だけでなく、データにもとづく科学理論の方法そのものの中立性が疑われることになるので、科学に対する懐疑が正当化されることになってしまうのだろうか。

まず、この主張の正しさを検討しよう。人間の知覚経験は主観的であり、その意味で非客観的かつ非中立的だ、という主張は正しい。だが、この主張は人間のすることすべてに当てはまる。わたしたちは個人個人、それぞれの見地・立場から世界に向きあい行動する。つねに空間内の特定の場所と時間内の特定の時点に位置するわたしたちに、それ以外のやり方で存在するすべはない。その意味で「中立的」ではない特定の見地から「主観的」にリアリティー^{たいじ}に対峙し行為するのが、わたしたち人間である（ほかの動物も同様だ）。科学データ収集という特定の行為も、そういう人間がおこなう行為として例外ではないので、そのおなじ意味で「中立的」でなく「主観的」である。さらに、そのおなじ意味で「客観性を欠く」といえる。

だが、そういう意味での非中立性、主観性、客観性の欠如は、すべての人間行為の諸特徴なので、それらの諸特徴を¹テイする行為やその結果が受けいれられないとしたならば、人間行為のすべてやその結果が受けいれられないことになる。科学をするという行為に限定しないで人間の行為すべてを弾劾する意図でなされたならば、前記の主張への反論は簡単である。 A 、

「その主張そのものが人間によってなされているので、その主張によれば、その主張をするという行為自体が弾劾されるべき行為である。すなわち、その主張は自己^{はんぱく}反駁的なのだ」。

いっぽう、人間の行為すべてではなく、科学的探究という行為のみを弾劾する意図でなされたとしたら、科学的探究をほかの

人間行為から²カクリされた異常な行為とみなすという点で、その主張は受け入れられない。さらに、その主張の根底には、科学的探究に求められる客観性や中立性を誤解する、あるいは曲解する態度がみえる。

すでに述べたように、わたしたちの視覚経験は、つねに視覚経験の主体に相対的という意味で主観的だが、だからといって、たとえば、日本の国旗が「白地に赤い丸」のデザインだという判断は I 判断だ、といわねばならないわけではあるまい。個々の主観的な視覚経験にもとづいて、わたしたちは、ほぼみなおなじ判断にいたる(わたしたち知覚経験主体は、みなヒトというおなじひとつの生物種のメンバーだという事実にかんがみれば、これはまったく当たり前のことだ)。その判断は、主観と主観のあいだの圧倒的な共通点にもとづいている、つまり「間主観的」な一般性があるという意味で「客観的」だといえるのである。そもそも「客観」というのは、主観を排除したあとにのこされる立場ではない。そのような「立場」などない。

B、人間(やほかの動物)ではなく神の立場からみた世界図が「客観的」な世界図だというのなら、科学的立場はその意味での「客観性」をあたえることはできないだろうが、そのような「客観性」の欠如を理由に科学に対する懐疑的な態度をとるためには、神の立場からのみ得られる知識以外の知識はもつに値しない、という前提がある。 C、そのような前提をマジメに受け入れる人間はいないだろう。

たとえば、鉛に³オセン³された飲食物を摂取するのは人体の健康をそこねる、という知識は、神の立場からのみ得られる知識ではないが、十分もつに値する知識だし、その知識にもとづいて行動することも十分意義のある(ときには⁴キユウメイ⁴という重要な目的にかなう)ことである。

科学データの発見・収集や理論構築の行為は、人間による行為であるかぎり、わたしたち個人個人の主観性に拘束されるのは、しかたがない。だが、科学は個人がひとりですることではないので、^B志を共有する数多くの科学者たちで形成される科学コミュニティにおける間主観性が、個人のバイアスを超越する役割をはたす。

わたしたちの観察を拘束する要因はほかにもある。そのうち特に大事なひとつの要因をみることにしよう。その要因とは、理論である。

あなたが着ているタータンチェックのチュニツクを、ふつうにわたしがみているとき、何がおきているだろうか。太陽からの光がチュニツクの表面に^{あた}当る。そしてそこから反射して、わたしのドウコウ⁵をぬけ網膜に到達すると、そこで形成される網膜像の情報処理の結果が、視神経の刺激をとおして脳の視床領域内の外側膝状体^{がいそくしじょうたい}に送られる。そこからさらなる脳生理学的プロセスを経て、最終的に「これはタータンチェックのチュニツクだ」というわたしの観察経験が帰結する。

ここで大事なのは、この観察^Cは最終的にわたしという心的主体がなす心的行為であり、その内容——すなわち観察内容——は観察主体であるわたしがくだす判断の内容であって、わたしの網膜や外側膝状体といった解剖学的部位における情報処理が生んでおわる情報内容ではない、ということである。

そもそも観察内容とは観察経験の内容にほかならず、観察者なしには観察経験はありえないので、観察者なしには観察内容はありません。網膜や外側膝状体は観察者ではない。何「者」でもない。観察経験はおろか、いかなる「経験」の主体でもない。よつて、網膜や外側膝状体やその他の解剖学的部位でなされる情報処理は、いかなる意味でも「経験」とはいえない。知覚現象の一部であることは確かであり、知覚情報処理現象ではあるが、観察経験ではない。

観察を知覚と^Iしてはいけない。知覚があるところにはどこでも観察があるとは限らないのである。知覚キカン⁶があれば知覚はあるが、観察者がいなければ観察はない。ということは、^D「観察の理論負荷性」の主張は、「知覚」の理論負荷性の主張ではないということだ。つまり、網膜や外側膝状体などの解剖学的部位で起きる視覚情報処理が理論負荷的だ、といっているのではないということである。なので、わたしが信奉する——あるいは仮定する——理論が、わたしの網膜による視覚情報処理に影響をあたえないからといって、「観察の理論負荷性」の主張が論駁^{ろんぱく}されたことにはならない。

ということ、知覚とは区別された意味での観察に^ウ検討をつづけよう。それにあたって、ごく常識的なやわらかい

意味での「理論」の概念を使つてはなしをすすめることにする。

長靴をはいたネコをみて、わたしたちは「あれは長靴をはいたネコだ」ということが即座にわかる。少なくとも、ふつうの太陽光のもとで、ふつうに歩いている長靴をはいたネコをふつうにみれば、即座にわかる。観察の理論負荷性によると、そのような観察経験はある意味での「理論」を仮定している。どういうことかという、その観察経験が「あれは長靴をはいたネコだ」という内容をもつためには、観察者がある特定の種類の「世界観」をもつことが必要だということなのである。つまり、ここでの「理論」とは、明確に定式化され意識的に主張されている言明(の集まり)にかぎらず、無意識に前提されている一般的・体系的な信念(の集まり)もふくむ広義の「理論」なのである。それをいま「世界観」という言葉であらわした。

この例で仮定されているのは、世界には長靴というものがあり、ネコというものがあり、はくという行為・状態があるのだ、という世界観である。長靴というものがある、と思うためには「長靴」という概念をもつ必要があり、「長靴」という概念は「履物」という一般的な概念を仮定しており、「履物」という概念は「身につけるもの」という、より一般的な概念を仮定している。さらに、「身につけるもの」という概念は「身」という概念なしにはもてず、「身」という概念はさらに無数の概念を仮定している。

D、ネコというものがある(いる)、と思うためには「ネコ」という概念をもつ必要があり、「ネコ」という概念は「動物」という一般的な概念を仮定しており、「動物」という概念は「生物」という、より一般的な概念を仮定している。さらに、「生物」という概念は「生きる」という概念なしにはもてず、「生きる」という概念はさらに無数の概念を仮定している。

E、「あれは長靴をはいたネコだ」という内容の観察経験をもつただけにも、無数の概念に支えられた特定の世界観が**エ**必要とされるのである。

(八木沢敬『はじめての科学哲学』より)

(注1) タータンチェック——イギリスのスコットランド地方で伝統的に用いられてきた、多色の格子柄。

(注2) チュニツク——衣服の名称。

問1 — 線1～6を漢字で書いたときに用いる字として最も適当なものを、次の各群の①～⑥のうちから、それぞれ一

つずつ選びなさい。解答番号は、1 1 2 2 3 3 4 4 5 5 6 6。

1	テイ	①	停	②	低	③	呈	④	訂	⑤	帝	⑥	諦
2	カクリ	①	拡	②	隔	③	核	④	画	⑤	角	⑥	殻
3	オセン	①	専	②	千	③	船	④	洗	⑤	鮮	⑥	染
4	キュウメイ	①	旧	②	糾	③	窮	④	救	⑤	球	⑥	吸
5	ドウコウ	①	孔	②	厚	③	坑	④	口	⑤	巧	⑥	興
6	キカン	①	幹	②	環	③	完	④	肝	⑤	官	⑥	艦

問2 — 線A「この主張」に対して、筆者はどのように述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選びなさい。解答番号は、7。

- ① 人間のすべての知覚経験が主観的であり科学的探究の諸行為は客観性を欠くという主張は、部分的に誤りがある。
- ② 人間行為のすべてが客観性を欠くという指摘は、その指摘自体もまた主観的な主張だと認めるもので、自己矛盾がある。
- ③ 科学的探究は他の人間行為とは異なるものであるため、すべての人間行為が非中立的であるという主張とは無縁である。
- ④ 真の科学的探究をするには、時間的・空間的制約に縛られないよう意識しながら、現実に対峙する必要がある。
- ⑤ 科学的探究という人間行為は非中立的なものである一方で、それにより得られた科学データは中立性を保証される。

問 3

ア

エ

に入る語句として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選

なさい。解答番号は、ア

8

イ

9

ウ

10

エ

11

。

ア ① はばかりれる

② かどわかされる

③ 閉ざされる

④ おびやかされる

⑤ ほだされる

イ ① 混同

② 一瞥 いちべつ

③ 峻別 しゅんべつ

④ 詮索

⑤ 断定

ウ ① 異を唱えて

② 的を射て

③ 趣向を凝らして

④ 高をくくって

⑤ 焦点をしぼって

エ ① 依然として

② 代替として

③ 背景として

④ 目標として

⑤ 参考として

問 4

A

E

に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑦のうちから、それぞれ一つずつ選

い。ただし、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合は、同じ番号の解答をすべて誤答とする。

解答番号は、A

12

B

13

C

14

D

15

E

16

。

① さて

② なぜなら

③ すなわち

④ このように

⑤ 同様に

⑥ また

⑦ しかし

問5

I

に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

17

① 特殊な

② 懐疑的な

③ 科学的である

④ 客観性がない

⑤ 主観的でない

問6

——線B「志を共有する数多くの科学者たちで形成される科学コミュニティにおける間主観性が、個人のバイアスを超越する役割をはたす」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

18

① 科学者たちの意見が一致したものは、神の立場から得られた客観的事実として認められるため、科学的行為の主観性の問題を乗り越えられるということ。

② 科学者一人一人の科学データ収集や理論構築などの行為に認められるわずかな客観性を総合することで、科学は主観性を獲得するということ。

③ 科学者の行為は主観的であることを免れ得ないが、科学者一人一人の主観と主観のあいだに見いだされる共通点は、客観的であると言えるということ。

④ 科学的行為から主観性を排することはできないため、科学者たちはやむをえず科学的な事実を彼らの嗜好しこうによって決定しているということ。

⑤ 科学者間では、同様の考えをもつ科学者と協働することで、自らの科学的行為の客観性を強引に確保する行為が横行しているということ。

問7 本文中の 甲 には、次の①～④を並べ替えたものが入る。正しい順に番号を選びなさい。

解答番号は、一番目 19 二番目 20 三番目 21 四番目 22。

① 理論が観察を拘束するわけがない、と思う読者は少なくないだろう。観察によるデータ収集の作業がまずあつてはじめて、理論構築の作業がはじまるのではないのか。

② では、観察を拘束するのが理論だということが、どういうことなのか、いくつかの例によってはつきりさせることからはじめよう。

③ だが、観察と理論の関係についてのそのような意見は、じつはナイーブすぎて、観察の独立性の過大評価をまねくことになる。

④ さきに観察そのあとで理論、というのが科学的方法の王道ではないのか。こう思うのはもつともである。

問8 — 線C「この観察」とあるが、これはどのような行為か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

23。

① 対象が光を反射するという科学的現象と、解剖学的過程を介した対象の知覚とが同時に起こる行為。

② 網膜、視神経、外側膝状体といった解剖学的部位において、観察対象を認識し情報として処理する行為。

③ 解剖学、脳生理学といった科学分野とはかけ離れた領域である、ものを見る主体による心的な行為。

④ あくまで観察対象に対する観察主体の判断であり、網膜や視神経などの解剖学的部位を介さない行為。

⑤ 解剖学的部位が対象を情報として処理するだけでなく、観察する主体が対象について判断をくだす行為。

問9

——線D『観察の理論負荷性』の主張とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

24。

① 観察によって得られる経験は、意識的にも無意識的にも、観察者のもつ数多くの概念を前提として成立しているということ。

② 人間の観察経験は意識せずとも観察者のもつ信念に左右されるという、きわめて特殊な知覚情報処理現象であるということ。

③ 人間の観察経験は明言された言説や無意識的な信念に支配されているため、人間が客観的な観察をすることはできないということ。

④ 観察という人間独自の主体的な行為は、解剖学や脳生理学などの科学的理論から見ると、知覚という現象にすぎないということ。

⑤ 観察という知覚と緊密な行為の成立には、ある特定の立場からみた無数の概念や定式化された言明による前提が必要であるということ。

問10

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

25

。

① 科学的行為が主観的であるとする見地からすると、はじめから主観的である人間行為のすべては科学的であると言える。

② 日本の国旗のデザインのように、視覚の対象のなかには主体によらず一定の視覚経験をもたらすものも存在する。

③ 神の立場からのみ得られる知識を仮定することは、科学理論が客観性に欠くことを示すうえで決定的な根拠となり得る。

④ 理論が知覚に影響をあたえることはないが、このことは観察経験が理論の影響を受けないことの証明にはならない。

⑤ 心的行為としての観察は、観察者が間主観的な一般性をもつ世界観を有することを前提に成り立つものである。

Ⅱ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答番号は、

26

43

。

これも今は昔、^(注1)法輪院大僧正^{ほかりんあん}覚猷^{かくい}といふ人おはしけり。その甥^{をひ}に陸奥前司^{むつのぜんじ}国俊^{くにとし}、僧正のもとへ行きて、「参りてこそ候へ」とい

はせければ、「只今^{げんざん}見参すべし。そなたにしばしおはせ」とありければ、待ちゐたるに、二時^{ふたとき}ばかりまで出^いであはねば、生腹立た

しう覚えて、「出^Aでなん」と思ひて、供に具したる雑色^{ざふし}を呼びければ、出で来たるに、「沓持^{くつ}て来」といひければ、持^aて来たるをは

きて、「出でなん」といふに、この雑色がいふやう、「僧正の御坊の、『陸奥殿に申したれば、疾^とう乗れとあるぞ。その車率^bて来』^(注2)

とて、『小御門^{こみかど}より出でん』と仰せ事候ひつれば、『やうぞ候ふらん』とて、牛飼ひ乗せ奉りて候へば、『待たせ給^{たま}へと申せ。時の

程ぞあらんずる。やがて帰^cり来んずるぞ』とて、早う奉りて出でさせ給ひ候ひつるにて候ふ。かうて一時^{ひととき}には過ぎ候ひぬらん」と

いへば、「わ雑色は不覚のやつかな。『御車をかく召しの候ふは』と、我にいひてこそ貸し申さめ。不覚なり」といへば、「うちさ^ろ

し退^のきたる人にもおはしませず。やがて御尻^{しきり}切奉りて、『きときとよく申したるぞ』と、仰せ事候へば、力及び候はざりつる」と

いひければ、陸奥前司^{むしろ}帰^{かへ}り上りて、いかにせんと思ひまはすに、僧正は定まりたる事にて、湯舟^{わら}に藁^{わら}をこまごまと切りて一はた

入れて、それが上に藁^{わら}を敷きて、歩きまはりては、左右なく湯殿へ行きて裸になりて、「えさい、かさい、とりふすま」といひ^(注4)

て、湯舟にさくとのけざまに臥^ふす事をぞし給ひける。陸奥前司、寄りて藁^{わら}を引きあげて見れば、まことに

殿の垂れ布を解きおろして、この藁をみな取り入れてよく包みて、その湯舟に湯桶^{ゆけ}を下に取り入れて、それが上に囲碁盤を裏返

して置きて、藁^{わら}を引き掩^{おほ}ひて、さりげなくて、垂れ布に包みたる藁をば大門の脇に隠し置きて、待ちゐたる程に、二時余りあり

て、僧正、小門より帰る音しければ、違ひて大門へ出でて、帰りたる車呼び寄せて、車の尻にこの包みたる藁を入れて、家へは

やかにやりて、おりて、「この藁を、牛のあちこち歩き困^うじたるに、食はせよ」とて、牛飼ひ童に取らせつ。

僧正は例の事なれば、衣脱^{きぬ}ぐ程もなく、例の湯殿へ入りて、「えさい、かさい、とりふすま」といひて湯舟へ躍り入りて、のけ

ざまに、ゆくりもなく臥^ふしたるに、碁盤の足のいかり差し上がりたるに尻骨を荒う突きて、年高うなりたる人の、死に入りて、

さし反りて臥したりけるが、その後音なかりければ、近う使ふ僧寄りて見れば、目を上^{かみ}に見つけて
かに』といへど、いらへもせず。寄りて顔に水吹きなどして、とばかりありてぞ息の下におろおろいはれける。この戯れ、いと
はしたなかりけるにや。

（『宇治拾遺物語』より）

（注1） 法輪院——覺猷の創建した園城寺（三井寺）内の僧院。

（注2） 小御門——小門（裏門）の敬称。

（注3） 尻切——足のかかとの部分がない、労働用の草履。

（注4） えさい、かさい、とりふすま——独自の呪文。

問1——線A『出でなん』と思ひて』とあるが、国俊がこのように思ったのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

26。

- ① 約束通りの時間に訪問したにもかかわらず、「お待ちください」という旨の伝言を受けたことが失礼だと思ったから。
- ② 自分が参上したことを伝えたにもかかわらず、伝言を受けたのみでもてなしかなかったことに怒りを感じたから。
- ③ 予想よりも長時間待たされたしまったために、覺猷との会見の後に入っていた予定の時間が迫ってきてしまったから。
- ④ 「すぐに行くから待っていてほしい」という旨の伝言を受けたにもかかわらず、長い間待たされて腹が立ったから。
- ⑤ かなりの長時間待たされていることで、自分の用事に連れ立って来てくれている雑色の様子が心配になったから。

問2 〰線 a 〱 c「来」の活用形として最も適当なものを、次の① 〱 ⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、a

27

 b

28

 c

29

。

- ① 未然形 ② 連用形 ③ 終止形 ④ 連体形 ⑤ 已然形 ⑥ 命令形

問3 〰線 〱 はの解釈として最も適当なものを、次の各群の① 〱 ⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、い

30

 ろ

31

 は

32

。

い 「早う奉りて出でさせ給ひ候ひつるにて候ふ」

- ① 早くにお帰りになって外に出ていらつしゃいました
② すぐにお出かけになって行ってしまうれました
③ とくにお乗りになってお出かけになりました
④ 早い時間に外出なさったので帰って参りました
⑤ もともと帰っていらつしゃってお伝えくださいました

ろ 「うちさし退きたる人にもおはしませず」

- ① 縁が遠くなつた人でもいらつしゃいません
② 家の様子を窺^{うかが}うような人ではいらつしゃいません
③ 家から遠ざかつていく人はいらつしゃいません
④ 家に帰ってしまう人でもいらつしゃいません
⑤ 当方と関係のある人はいらつしゃいません

は「いとはしたなかりけるにや」

- ① ずいぶんと中途半端だったのではないか
- ② なんとなく見苦しい結果になったのかもしれない
- ③ かなり失礼な行いだったと思われる
- ④ たいそう度を超したことはないか
- ⑤ 大変不愛想な扱いだったのではないかと疑われる

問4 — 線B「わ雑色は不覚のやつかな」とあるが、国俊がこのように言ったのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

33。

- ① 国俊と覚猷の伝言の齟齬そごを正せず、長時間待たされてしまうことになったから。
- ② 覚猷の発言に対して違和感を覚えていたのに、外出させてしまったから。
- ③ 覚猷が車で出かけるときに、戻って来る時間を聞きそびれてしまったから。
- ④ 覚猷が出かけて二時間以上経ったことを国俊に伝えに来なかったから。
- ⑤ 主人である国俊の許可を取らずに、覚猷に勝手に車を貸してしまったから。

問5 〰線ア～オの本文における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び

なさい。解答番号は、ア 34 イ 35 ウ 36 エ 37 オ 38。

ア 「きときと」 ① さつさと ② きつぱりと ③ がつくりと

④ 是非にと ⑤ わざと

イ 「のけざまに」 ① うつぶせに ② 後ろ向きに ③ 次々に

④ 横向きに ⑤ あおむけに

ウ 「歩き困じたる」 ① 歩いたり走ったりした ② 歩いて道に迷った ③ 歩きまわった

④ 歩き苦しんだ ⑤ 歩き疲れた

エ 「ゆくりもなく」 ① 何の用心もなく ② 行方も知らず ③ 遠慮なく

④ 目的もなく ⑤ 縁がなく

オ 「いらへ」 ① 意識 ② 返事 ③ いらだち

④ 質問 ⑤ 理由

問6 ア に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、39。

① 藁をこまごまと切り入れたり

② 裸になりてのけざまに臥したりけり

③ 湯船へ躍り入りたる跡がありけん

④ さし反りて臥したりけり

⑤ 歩きまはりて湯殿に行かんとするなり

問7

イ

に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

40

① とばかりありて

② 歩きまはりて

③ 死に入りて

④ 衣着たりて

⑤ 音なりて

問8

——線C「この戯れ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は、

41

① 湯舟の中に敷いてある藁を取り除いて覚猷を困らせるために、湯舟の藁を覚猷が大事に使っている垂れ布を使って包み、牛の餌として牛飼童に渡すこと。

② 覚猷が湯舟に飛び込んだときに、囲碁盤の足に体を打ち付けて痛い目に遭わせるために、普段から湯舟に入れてある藁を取り除き、代わりに裏返した囲碁盤を置くこと。

③ 覚猷が湯舟に飛び込んだときに、その勢いで湯桶を壊して困らせるために、湯舟の中に敷いてあるはずの藁を全て取り除いて代わりに湯桶を置き、さらにその上に囲碁盤を置くこと。

④ 長時間待たされた自分と同じ目に遭わせると同時に、入浴の時間を台無しにしてやるために、湯舟の藁を取り除いて、覚猷が外出から帰ってきたときには裏の門から抜け出すこと。

⑤ 覚猷が湯舟に飛び込んだときにバランスを崩して湯舟の床に頭を打ち付け、死に至らしめるために、湯舟の中に入れてある藁を取り除き、囲碁盤を代わりに置くこと。

問9

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

42。

- ① 覚猷が「小御門より出でん」と言ったのは、国俊に見つからないように外出をしようと思ったからである。
- ② 国俊は無断で車を貸してしまった雑色を叱責したが、雑色の報告を聞いて覚猷の行動に問題があると考えた。
- ③ 国俊が湯舟から取り除いた藁を大門に置いておいたのは、覚猷が帰ってきたら渡すつもりだったからである。
- ④ 覚猷は国俊を長時間待たせていることを認識していたため、普段とは異なり帰宅時に湯舟に直行しなかった。
- ⑤ 国俊のいたずらによって覚猷が大きな怪^け我^がをした話から、作者は人を待たせてはいけないという教訓を述べた。

問10

『宇治拾遺物語』と同じく、鎌倉時代に成立した作品を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は、

43。

- ① 沙石集
- ② 伊曾保物語
- ③ 雨月物語
- ④ 太平記
- ⑤ 今昔物語集